

作物名：キャベツ

病害虫名：黒斑病（病原：*Alternaria brassicae*）



葉の斑点症状



黒斑病菌の分生子

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉に発生し、結球期から収穫期にかけて下葉に発生する。
- ・病斑は2～10mmの輪郭が明確な円形で、淡褐色ないし黒褐色を呈し、明瞭な同心輪紋を生じる。
- ・黒すす病（病原：*Alternaria brassicicola*）の病斑に類似するが、黒すす病は夏を中心として高温期に発生し、病斑上にすす状のかびを生じるが、本病は低温期に発生する点及び明瞭な同心輪紋を生じる点で区別できる。
- ・発生は下葉に限られるため、実害は少ない。

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は被害株の残渣や種子上で菌糸又は分生子の形で越冬し、翌年の伝染源となる。
- ・被害植物の病斑上に形成された分生子が空气中に飛散し、二次伝染を繰り返す。
- ・種子伝染、水滴伝染、接触伝染、空気伝染する。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、分生子を形成する。分生子の発芽適温は15～20℃で、菌の生育適温は20℃前後である。
- ・本病菌はだいこん、はくさい、かぶ等、他のアブラナ科野菜にも寄生する。
- ・11～4月の低温期に発生が多く、発生適温は15～20℃で、特に結球期以降の平均気温17℃前後で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- ・発生適温条件下における感染には、濡れ時間が6時間以上必要であり、濡れ時間が長くなるほど感染が多くなる。
- ・肥料切れを起こすと発生が多くなる。

4 防除対策

- ・種子伝染するので、消毒済みの種子を使用する。
- ・発病苗や発病葉は伝染源となるので、ほ場外に持ち出して土中深くに埋設する。
- ・肥料不足は発生を助長させるので、適切な肥培管理を行う。下葉は結球葉の生産主体となり、特に結球中期までは窒素肥料が必要なので不足のないようにする。
- ・土壌の過湿や風通しが悪いほ場では多発しやすいので、排水対策を図るとともに密植を避け通風を良くする。
- ・黒すす病、べと病、菌核病の防除を行っていれば、特に薬剤の予防散布の必要はなく、発病を認めてから薬剤防除を行う。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編3（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影